

平成21年度 病害虫発生予察情報 注意報第2号

平成21年 4月23日
島 根 県

現在ヒメトビウンカの生息密度が高く、イネ縞葉枯病ウイルスの保毒虫率も高い状況です。今後本虫によるイネ縞葉枯病の伝播・感染が懸念されるので、注意報を發表します。現地では発生状況の把握に努め、箱施薬の徹底など適切な防除対策を講じてください。

記

1. 病害虫名 ヒメトビウンカ（縞葉枯病）
 2. 発生地域 県下全域
 3. 発生時期 主として6月上中旬～（第1世代成虫）
 4. 発生量 やや多い～多い
5. 根拠
- 1) 4月7～20日にかけて、水田、ムギ畑、周辺の畦畔などで捕獲した越冬世代ヒメトビウンカについてイネ縞葉枯病ウイルスの保毒虫率調査（エライザ法）を行ったところ、保毒虫率は6.1%と高い割合を示した。
 - 2) 同時期に県内114箇所の圃場ですくい取り調査を行ったところ、平均で1.52頭/20回振りのヒメトビウンカが捕獲され、県内全域で発生が認められた。
 - 3) 前年（平成20年）8月下旬～9月上旬のイネ縞葉枯病発生圃場率は16.9%で、稲刈り後のひこばえではイネ縞葉枯病の発病が多く観察された。
 - 4) 1か月予報（4月17日広島地方气象台発表）によると、気温は平年並みか高く推移する見込みであり、ヒメトビウンカの発生に好適な条件が予想される。
6. 防除対策及び防除上の注意事項
- 1) 水稻移植時にはウンカ類に効果のある箱薬剤を施用する。必ず決められた使用量を施用する。
 - 2) 圃場の耕起や、畦畔などの草刈りをする事でヒメトビウンカの密度低下を図る。
 - 3) ヒメトビウンカの飛び込みによるウイルス伝搬を防ぐため、イネ科雑草地や麦類圃場近辺での育苗は避ける。
 - 4) 窒素過多な栽培は縞葉枯病の発生を助長するので適切な肥培管理に努める。
 - 5) 平成20年のようなヒメトビウンカの多飛来も懸念されるので、今後の発生予察情報に注意する。
 - 6) 薬剤の使用に当たっては、農薬の使用基準ならびに農作物病害虫雑草防除指針の注意事項を遵守する。

表1. ヒメトビウンカのイネ縞葉枯病ウイルス保毒状況（4月7～20日採集）

地 域	供試虫数（頭）	保毒虫（頭）	保毒虫率（%）
県東部	95	5	5.3
県西部	37	3	8.1
計・平均	132	8	6.1

表2. ヒメトビウンカの20回振りすくい取り調査（4月7～20日採集）

地 域	成虫（頭）	幼虫（頭）	計（頭）
県東部	1.68	0	1.68
県西部	1.06	0	1.06
平均	1.52	0	1.52
（参考：3月下旬の平年値）			0.03



写真1. イネ縞葉枯病



写真2. ヒメトビウンカ
（ウイルスを媒介）